合流したら舌先同士を絡めあうのはいつものセオリーで、どちらかがそのつもりなら甘噛みが入る時もある。
今日は伊吹がマモンの舌に噛みついた。
生意気な小娘を演じたいのなら伊吹はここでさらに力を込めて噛みついてくるが、今日はそういう気分ではなかったらしく優しく噛んで終わりになる。
舌を絡め合わせながらマモンは考える。
はたして、今日は甘い自分を出そうか？このままちょい悪を演じていようか？
伊吹にべた惚れになっている自分だけは出さない。あんなの自分じゃないし、なにより本人の前で出すなど恥ずかしさしかない。
自分一人でもんもんと伊吹を想っている間は好きすぎてどうにもならねえだのHがしてぇだのと泣き言のようなことを言えるが、そんな気弱で泣き言だらけの自分は伊吹の前では見せられない。
伊吹の前ではあくまでちょい悪でお金ちゃん大好きでいざとなったらちょっと頭のいいところを見せられる強欲のマモンでありたかった。

同じパリピでも、ありのままの自分で貫くアスモデウスとはこの辺が違うところだった。
「今日は乗り気か？」
口づけが終わった後、マモンは首筋に舌を出しながら伊吹に問いかける。
伊吹はその言葉に返事をしないでいるが、全身からかすかに漂ううっとりとした空気がマモンの言葉とおりであることを示している。
そう、今日伊吹は乗り気なのだ。
マモンの舌はつーっと伊吹の胸元に落ちると乳首を軽く跳ね上げたわむれるように口の中に含んだ。
舌先で舐めたり軽く噛んだり吸ったりと思いつく限りの愛撫をしもう片方の胸は手で撫でる。
その間伊吹はやはり無言であったが、抵抗は全くしてこなかった。
胸から口を外し一度優しく抱きしめる。

歯だと肌が触れ合う部分がとても心地よく、マモンのペニスは素早く完全に勃起した。
再びマモンの唇が伊吹の唇に重なる。
二人の舌先はまた口内で絡みつきぶつかり合い、そして互いの唾液が混じったものに濡れる。
あえて舌を突き出したまま唇を放してみれば、まるでアダルトビデオのように絡み合う舌が一瞬露骨に見える。
マモンの視界に入ったその光景は、もっと伊吹とキスがしたいという感情を湧き上がらせ伊吹の体を抱きしめる行動につなげた。